

きんせい ひと  
**近世の人びと**  
 (江戸時代)

徳川家康が江戸の町づくりを始めると、江戸川区でも新田開発が盛んにおこなわれました。宇喜新田を開拓した宇田川喜兵衛をはじめ、田島図書(一の江新田)、篠原伊豫(伊豫新田)の3人の新田開発が知られています。

彼らは開拓農民をあつめ、費用を負担し、開発を指導しました。

また、幕府は行徳の塩を運ぶため、船堀川を整備拡張して新川を開きました。そして、江戸の



一之江名主屋敷の主屋(昭和33年)



成田山不動明王  
石造道標

て、江戸の発展とともに江戸へ物資を運ぶた

めの舟運が盛んになりました。

東北や北関東の物資は、陸路や江戸湾経由の船便に頼っていましたが、江戸川が整備されると、銚子から利根川をさかのぼり、関宿を経て江戸川を下り、新川、小名木川を

通って江戸城下へ運ばれていきました。江戸川区には、元佐倉道、岩槻道、行徳道などが通っていたため街道は旅人たちでにぎわっており、また江戸川や新川といった河川は往来する舟によってにぎやかでした。

